「抗インフルエンザウイルス剤の
処方動向調査　2011」

平成23年11月18日

株式会社QLife（キューライフ）

【結論の概要】

■調査の背景:

2009年の新型インフルエンザ(A/H1N1)発生以降、一般の人々のなかでも、インフルエンザに関する情報を積極的に入手していこうという動きがみられている。抗インフルエンザウイルス剤(以下、抗ウイルス剤)についても、ここ数年は「患者の異常行動」や「耐性ウイルス」などの話題がのぼり、様々な情報が行き交っている。

こうした状況下で医師はどのような処方判断をしているのだろうか？患者と医師とのやりとりはどんな内容であろうか？全国の内科・小児科を中心とする医師へのアンケートからその実態を探り、正しい情報の在り方を考える糧とする。

■主な結論:

この集計結果から見えたものは、抗ウイルス剤における中心的な処方薬剤がタミフルであり、それは「効果の確実性」を第一に求めての結果であること。ただし「耐性ウイルス」に関しては医師の間でも情報錯綜・誤解があり、また「異常行動」に関しては昨年時点でも患者間では不安・疑問を持つ人がいたという実態がわかった。

1. 薬剤選択について

1)2010-2011年実績はタミフル

抗ウイルス剤が4剤出揃った2010-2011年シーズンの処方比率は、タミフルが最も処方されており、その割合は約57%にのぼった。

2)選択の基準は、「効果」、「安全性」の順

選択する基準として最も重視しているのが「効果の確実性」と過半数の医師が回答。「高い安全性」「服用しやすい剤形」が続いた。

2. 耐性ウイルスに関する理解について

1)耐性ウイルスに関する情報が錯綜

「流行している」「流行していない」と回答した医師がそれぞれ同じ比率だったことに加え、「どちらともいえない」「わからない」が半数を超えるなど、情報が錯綜している。

2)耐性ウイルスの増殖性・病原性について「変わらない」「わからない」が大勢を

「変わらない」と回答した医師が多く、全体の約4割。また、3割強の医師が「わからない」と回答しており、耐性ウイルスに対する正確な情報を得ることができていないことが推測される。

Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

【調査実施概要】

▼実施主体
株式会社QLife（キューライフ）

▼実施概要
(1) 調査名称:　抗インフルエンザウイルス剤の処方動向調査　2011
(2) 調査対象:　2010～2011年シーズンに抗インフルエンザウイルス剤を処方した全国の医師
(3) 有効回答数: 505人
(4) 調査方法:　インターネット調査
(5) 調査時期:　2011/9/1～2011/9/10

▼回答者の属性分布
(1)性・年代:

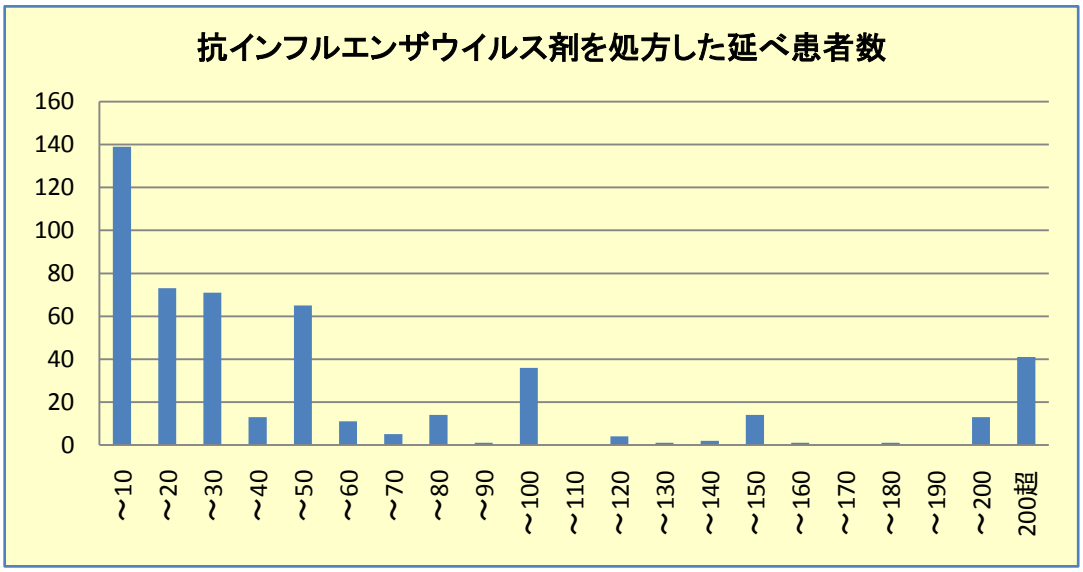
	男	女	計	男	女	計
20代	5	2	7	1.0%	0.4%	1.4%
30代	83	23	106	16.4%	4.6%	21.0%
40代	176	27	203	34.9%	5.3%	40.2%
50代	159	7	166	31.5%	1.4%	32.9%
60代	23	0	23	4.6%	0.0%	4.6%
計	446	59	505	88.3%	11.7%	100.0%

(2) 診療科目

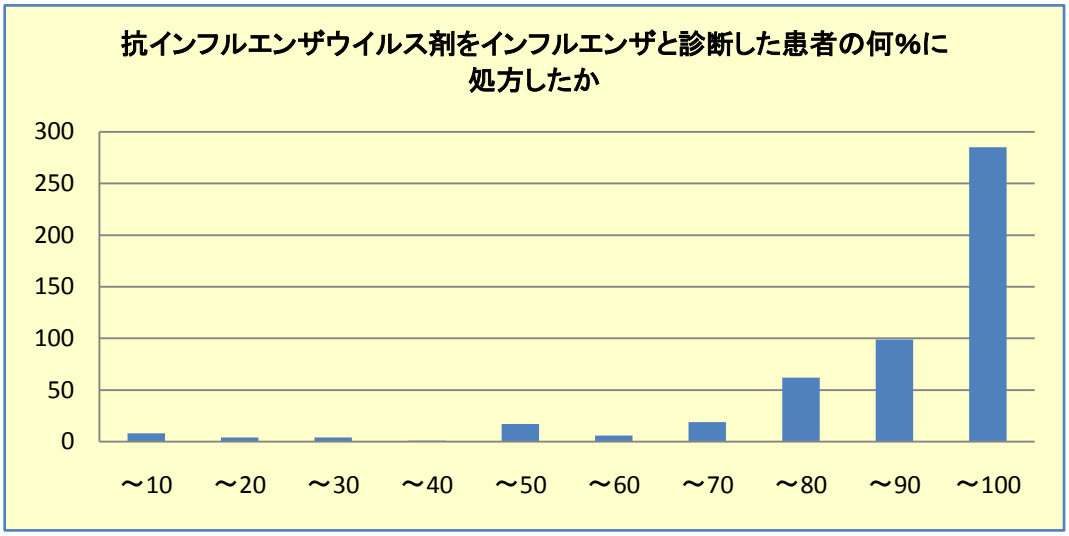
	n	%
小児科	86	17.0%
内科	379	75.0%
感染症科・感染症内科	10	2.0%
耳鼻咽喉科	30	5.9%
計	505	100.0%

Copyright © QLife, Inc.　All Rights Reserved.

▼回答者の属性分布（続き）
（4）2011年度に抗インフルエンザを処方した述べ患者数（概数）



（5）インフルエンザ患者に対する抗インフルエンザウイルス剤の処方比率（概数）



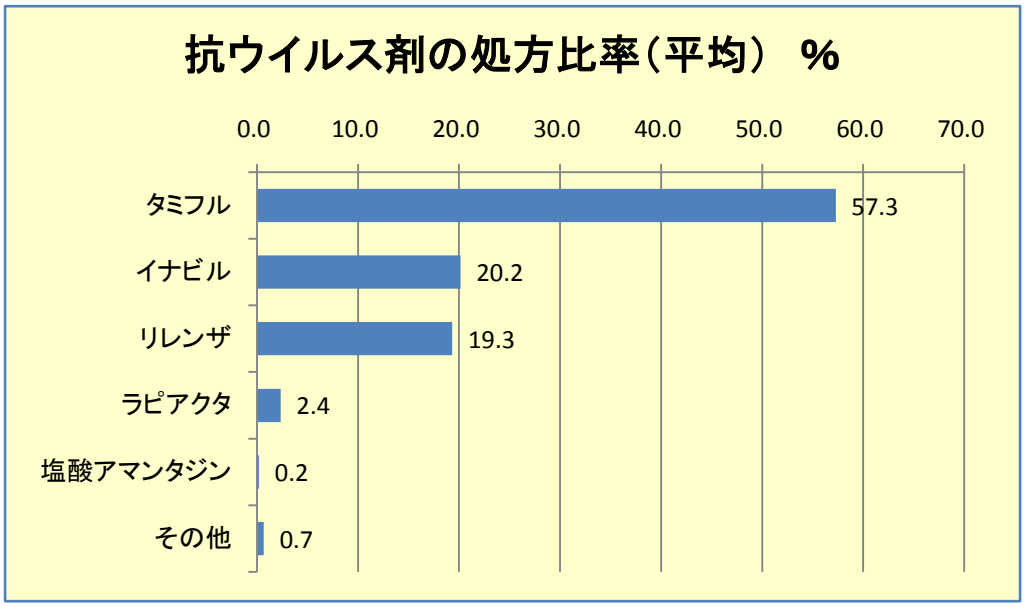
Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

【調査結果の詳細】

1．抗インフルエンザウイルス剤の処方実績について、合計が100%になるようにそれぞれの薬剤の処方（患者数）比率（%）を教えてください。

抗ウイルス剤が4剤出揃った2010～2011年にかけての処方実績は、タミフルが過半数の約57%と最も処方されている結果となり、ついでイナビル、リレンザ、ラピアクタと続いた。

	平均値
タミフル	57.3%
イナビル	20.2%
リレンザ	19.3%
ラピアクタ	2.4%
塩酸アマンタジン	0.2%
その他	0.7%
計	100.0%



Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

2. 抗インフルエンザウイルス剤を選択する上で、次の選択肢の中で最も重視するものを選んでください。また、2番目、3番目にあてはまるものも選んでください。

最も重視するものは「効果の確実性」で59%と、他を圧倒する結果となった。2番目に重視するのは「高い安全性」。インフルエンザ症状からの早く、確実な回復を最も重視している結果となった。その次に重視するものは分散する結果となったが、服薬アドヒアランスにも関係する「服用しやすい剤形」がリードする結果となった。

最も重視するもの

	n	%
効果の確実性	**296**	**58.6%**
高い安全性	136	26.9%
服用し易い剤形	28	5.5%
服用回数が少ない剤形	10	2.0%
患者さんの希望	26	5.1%
MRや医薬品卸からの強い推奨	0	0.0%
同僚医師からの評判	1	0.2%
学会ガイドラインやオピニオンリーダーの意見	8	1.6%
薬価（患者の経済的負担全般を考慮する場合も含める）	0	0.0%
計	505	100.0%

2番目に重視するもの

	n	%
効果の確実性	130	25.7%
高い安全性	**232**	**45.9%**
服用し易い剤形	61	12.1%
服用回数が少ない剤形	26	5.1%
患者さんの希望	28	5.5%
MRや医薬品卸からの強い推奨	0	0.0%
同僚医師からの評判	7	1.4%
学会ガイドラインやオピニオンリーダーの意見	13	2.6%
薬価（患者の経済的負担全般を考慮する場合も含める）	8	1.6%
計	505	100.0%

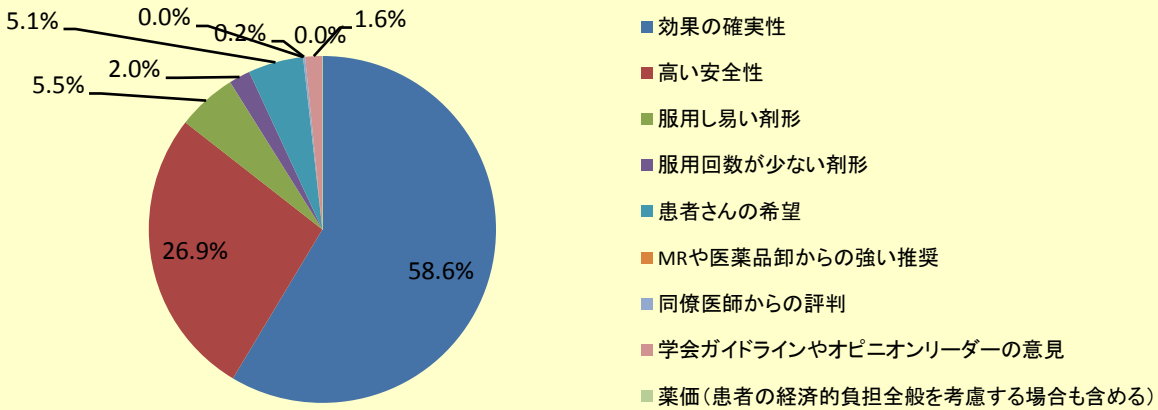
3番目に重視するもの

	n	%
効果の確実性	37	7.3%
高い安全性	62	12.3%
服用し易い剤形	**154**	**30.5%**
服用回数が少ない剤形	86	17.0%
患者さんの希望	67	13.3%
MRや医薬品卸からの強い推奨	6	1.2%
同僚医師からの評判	18	3.6%
学会ガイドラインやオピニオンリーダーの意見	52	10.3%
薬価（患者の経済的負担全般を考慮する場合も含める）	23	4.6%
計	505	100.0%

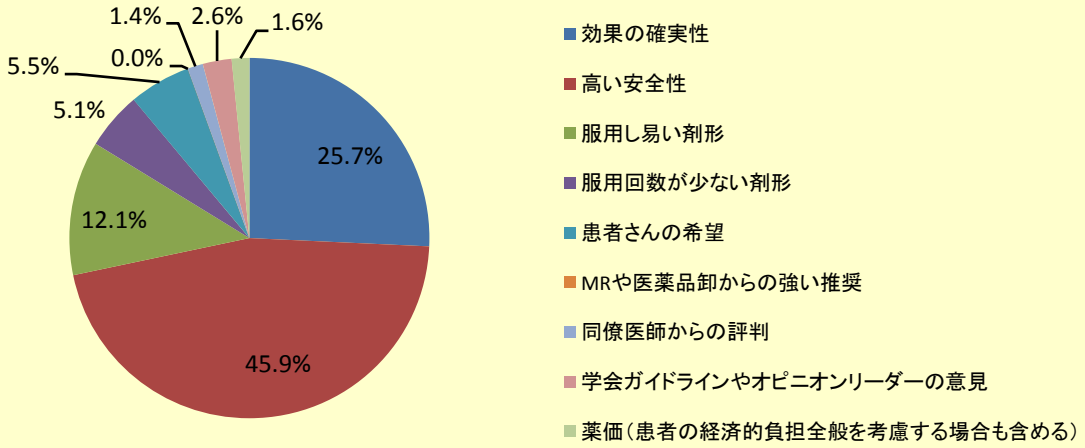
Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

2．抗インフルエンザウイルス剤を選択する上で、次の選択肢の中で最も重視するものを選んでください。また、2番目、3番目にあてはまるものも選んでください。（詳細続き）

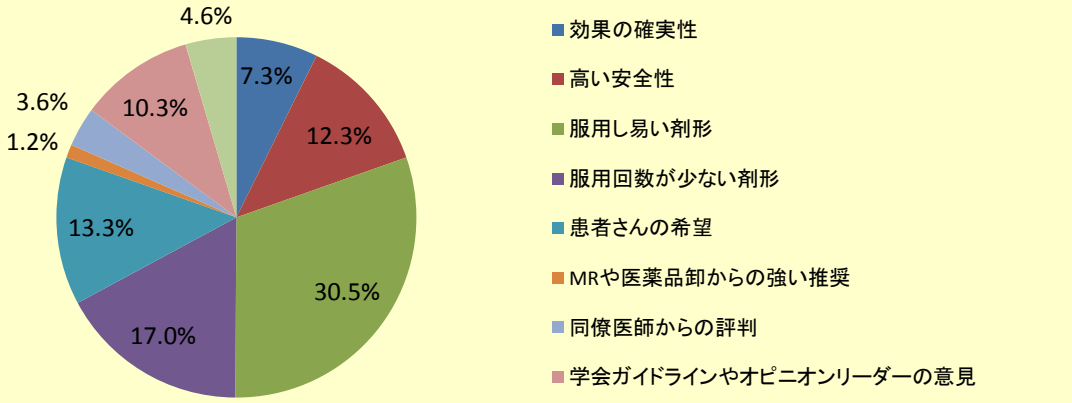
抗インフルエンザウイルス剤を選択する上で、最も重視するもの



2番目に重視するもの



3番目に重視するもの

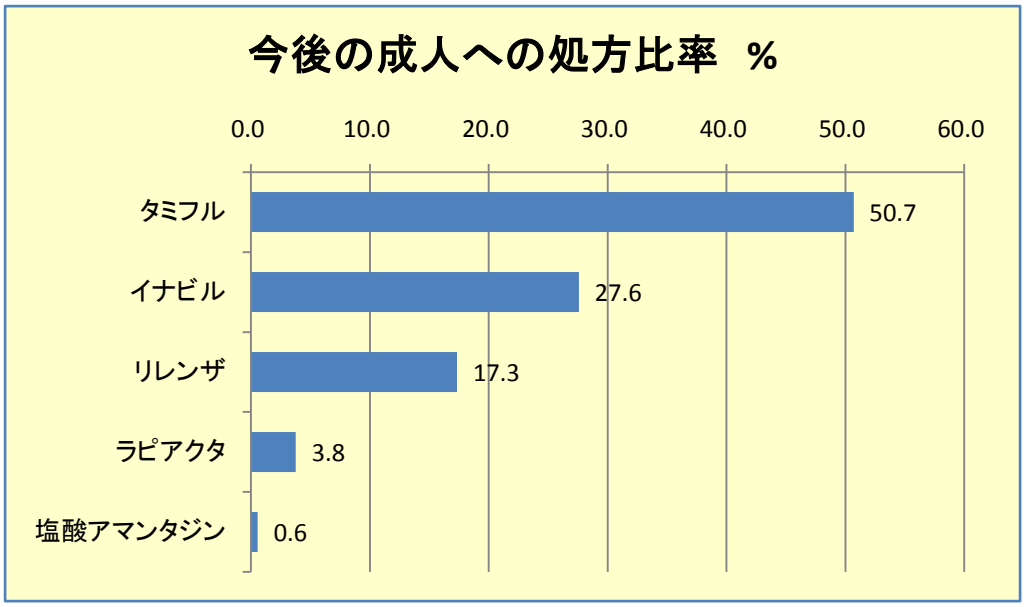


Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

3. 今後の抗インフルエンザウイルス剤の「成人への処方（患者数）比率」について、合計が100%になるように予想を教えてください。

今後の成人への処方意向については、タミフルが過半数を占めたが、2010～2011年の全体の処方動向と比較すると約7ポイントの低下。その減少分をイナビルが吸収する結果となった。

	平均値
タミフル	50.7%
イナビル	27.6%
リレンザ	17.3%
ラピアクタ	3.8%
塩酸アマンタジン	0.6%
計	100.0%

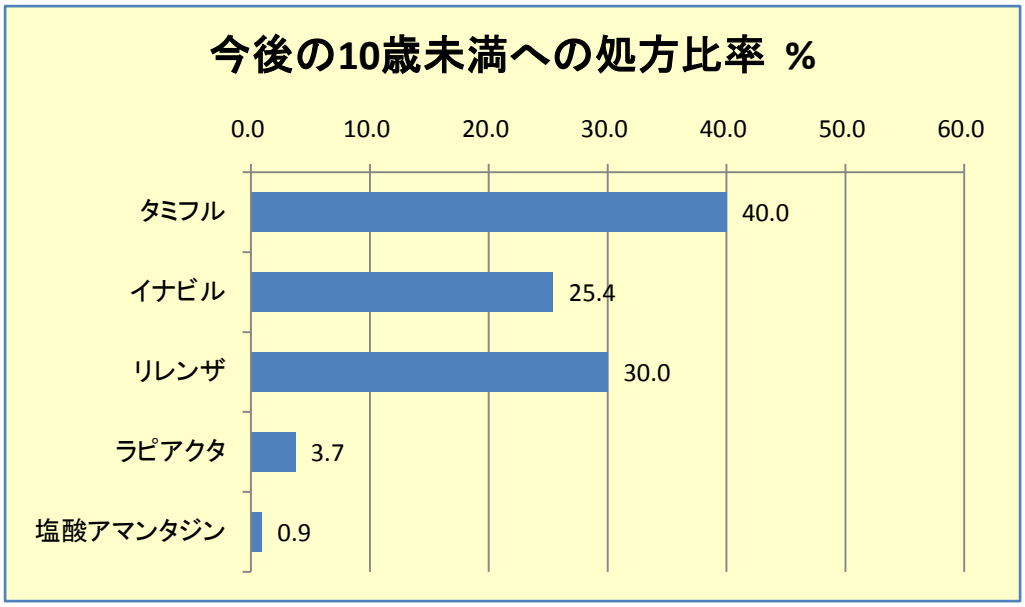


Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

4. 今後の抗インフルエンザウイルス剤の「10歳未満への処方（患者数）比率」について、合計が100%になるように予想を教えてください。

10歳未満への処方比率では、タミフルのトップは変わらないものの、2位にリレンザがつく結果となった。発売から時間が経過し、よりエビデンスが確立している2剤が上位に選ばれているものと推測される。

	平均値
タミフル	40.0%
イナビル	25.4%
リレンザ	30.0%
ラピアクタ	3.7%
塩酸アマンタジン	0.9%
計	100.0%



Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

5. 次の選択肢のうち、最も効果が優れていると考えられている抗インフルエンザウイルス剤を選んでください。また、2番目、3番目にあてはまるものも選んでください。

設問3および設問4の処方比率の背景を探るために、効果／安全性／服用しやすさの3項目において、各薬剤をどうみているのかを聞いた。
まず、効果に関する評価の面ではタミフルがトップに。次いで評価されたのがラピアクタだった。これは、静注剤であり、緊急性を要する重症患者への処方ケースが多いことから、効果が目の前で実感しやすいためと推察される。吸入剤の2剤はそれぞれ2番手、3番手として最も評価を受けている。

最も効果が優れている

	n	%
タミフル	**160**	**31.7%**
イナビル	134	26.5%
リレンザ	66	13.1%
ラピアクタ	143	28.3%
塩酸アマンタジン	2	0.4%
総計	505	100.0%

2番目

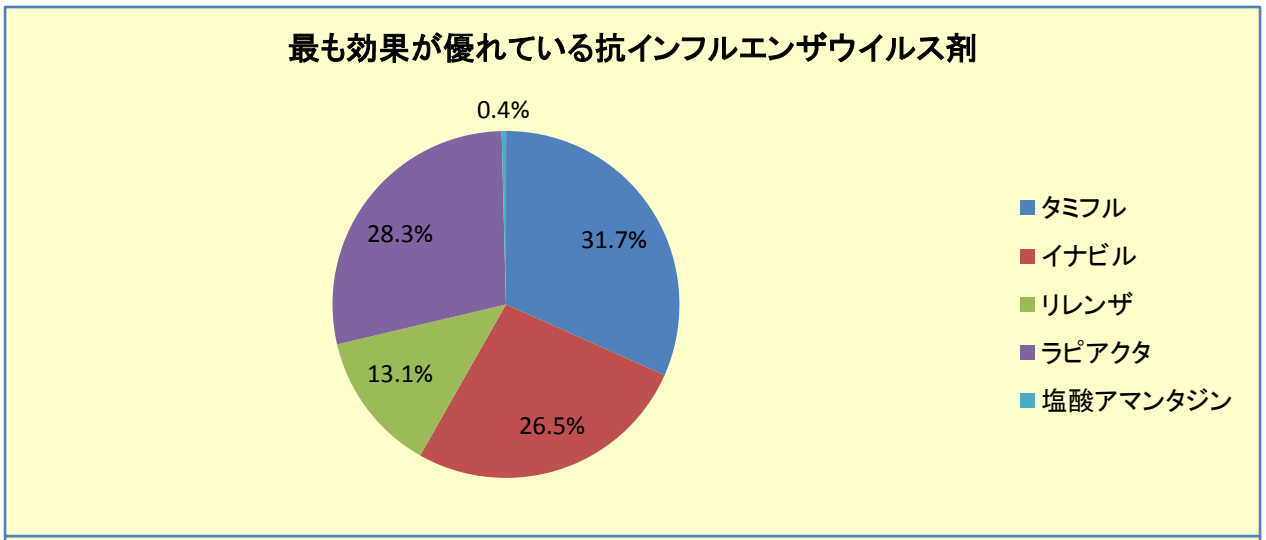
	n	%
タミフル	121	24.0%
イナビル	**173**	**34.3%**
リレンザ	158	31.3%
ラピアクタ	51	10.1%
塩酸アマンタジン	2	0.4%
総計	505	100.0%

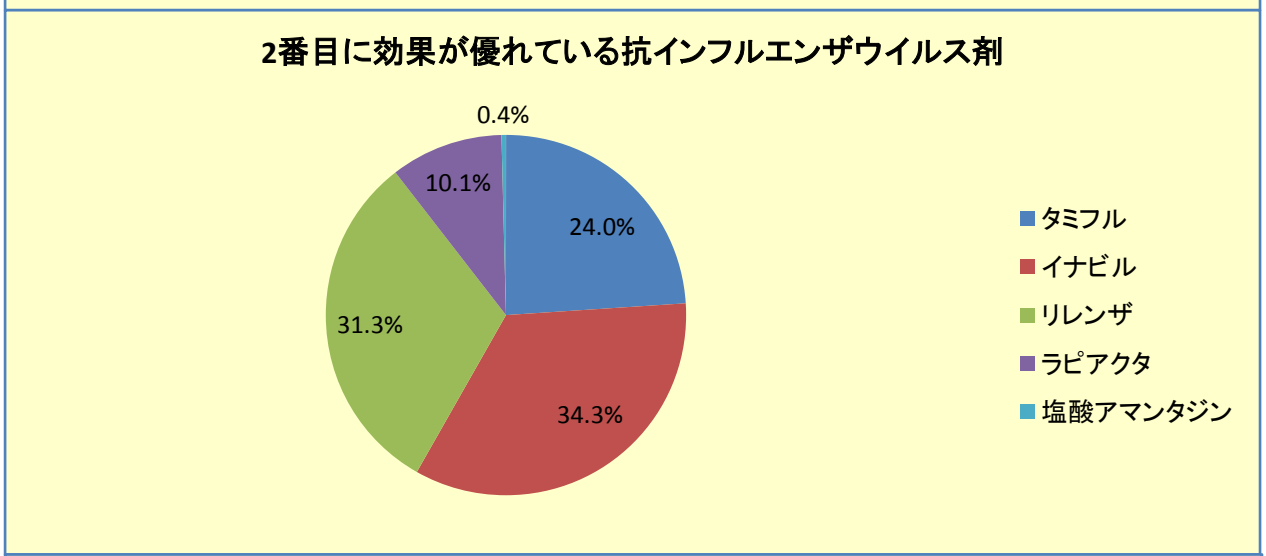
3番目

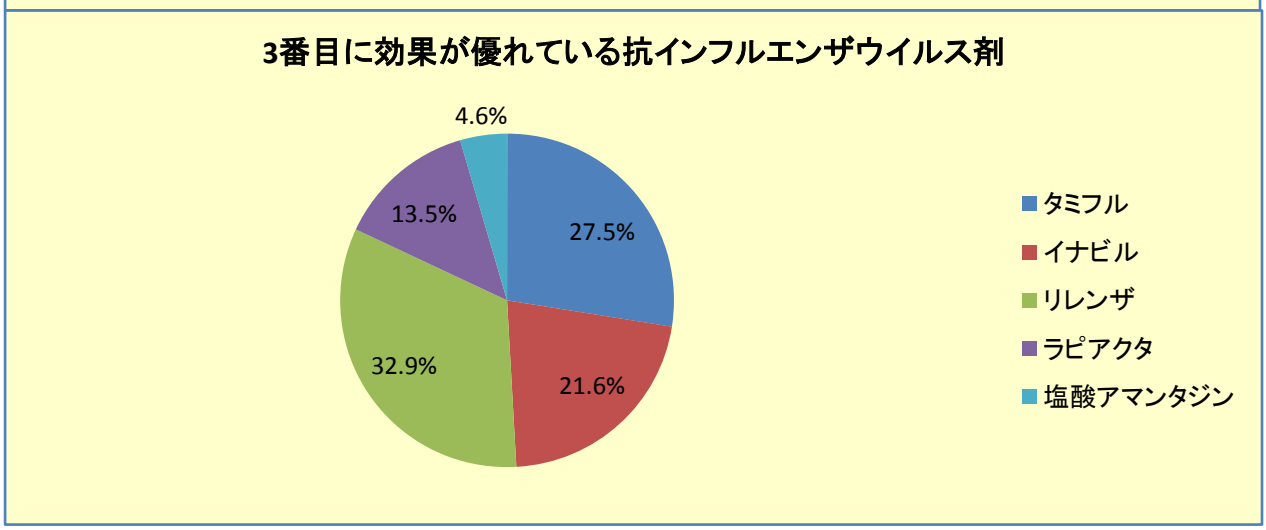
	n	%
タミフル	139	27.5%
イナビル	109	21.6%
リレンザ	**166**	**32.9%**
ラピアクタ	68	13.5%
塩酸アマンタジン	23	4.6%
総計	505	100.0%

Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

5. 次の選択肢のうち、最も効果が優れていると考えられている抗インフルエンザウイルス剤を選んでください。
また、2番目、3番目にあてはまるものも選んでください。（詳細続き）







Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

6. 次の選択肢のうち、最も安全性が高いと考えられている抗インフルエンザウイルス剤を選んでください。また、2番目、3番目にあてはまるものも選んでください。

安全性の面ではリレンザ、イナビルの吸入剤が「高い」と評価された。タミフルに関してはこれら吸入剤の次、3番目に安全性が高い、と評価する医師が最も多かった。

最も安全性が高い

	n	%
タミフル	67	13.3%
イナビル	141	27.9%
リレンザ	**230**	**45.5%**
ラピアクタ	32	6.3%
塩酸アマンタジン	35	6.9%
総計	505	100.0%

2番目

	n	%
タミフル	97	19.2%
イナビル	162	32.1%
リレンザ	**177**	**35.0%**
ラピアクタ	50	9.9%
塩酸アマンタジン	19	3.8%
総計	505	100.0%

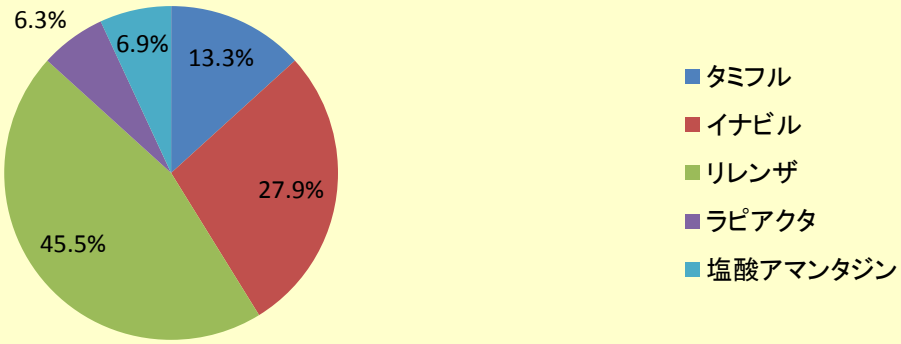
3番目

	n	%
タミフル	**190**	**37.6%**
イナビル	111	22.0%
リレンザ	77	15.2%
ラピアクタ	93	18.4%
塩酸アマンタジン	34	6.7%
総計	505	100.0%

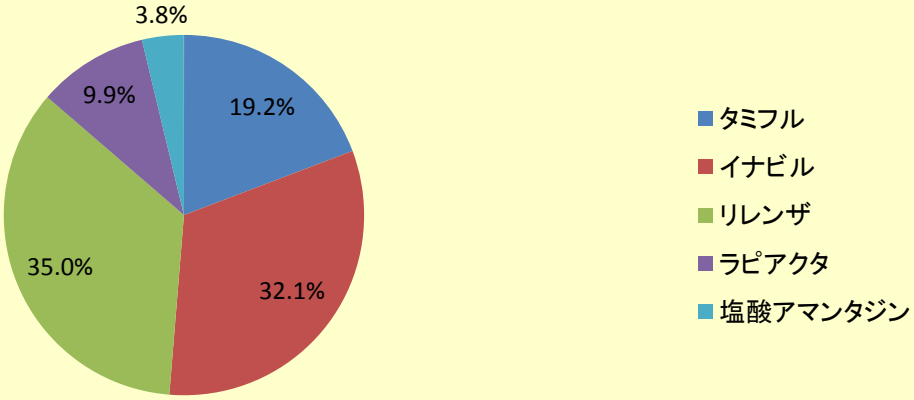
Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

6. 次の選択肢のうち、最も安全性が高いと考えられている抗インフルエンザウイルス剤を選んでください。また、2番目、3番目にあてはまるものも選んでください。（詳細続き）

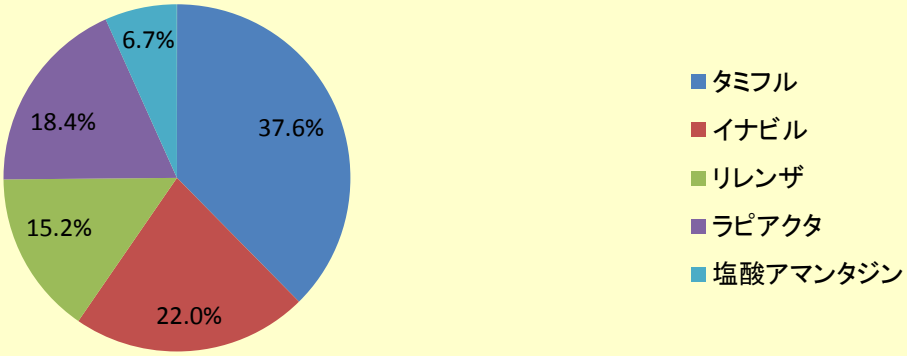
最も安全性が高い抗インフルエンザウイルス剤



2番目に安全性が高い抗インフルエンザウイルス剤



3番目に安全性が高い抗インフルエンザウイルス剤



Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

7. 次の選択肢のうち、最も「患者さんが服用しやすい剤形」と考えられている抗インフルエンザウイルス剤を選んでください。また、2番目、3番目にあてはまるものを選んでください。

「服用しやすい剤形」に関しては、カプセルに加え、ドライシロップと複数の剤形を有するタミフルが過半数の医師から「服用しやすい剤形」だと評価されている。同じ吸入型でもイナビルとリレンザははっきりと差がつく結果となったが、これは1日1回服用のイナビルを「より服用しやすい」と評価したものと考えられる。

最も「患者さんが服用しやすい剤形」

	n	%
タミフル	**270**	**53.5%**
イナビル	134	26.5%
リレンザ	44	8.7%
ラピアクタ	45	8.9%
塩酸アマンタジン	12	2.4%
総計	505	100.0%

2番目

	n	%
タミフル	114	22.6%
イナビル	**165**	**32.7%**
リレンザ	116	23.0%
ラピアクタ	55	10.9%
塩酸アマンタジン	55	10.9%
総計	505	100.0%

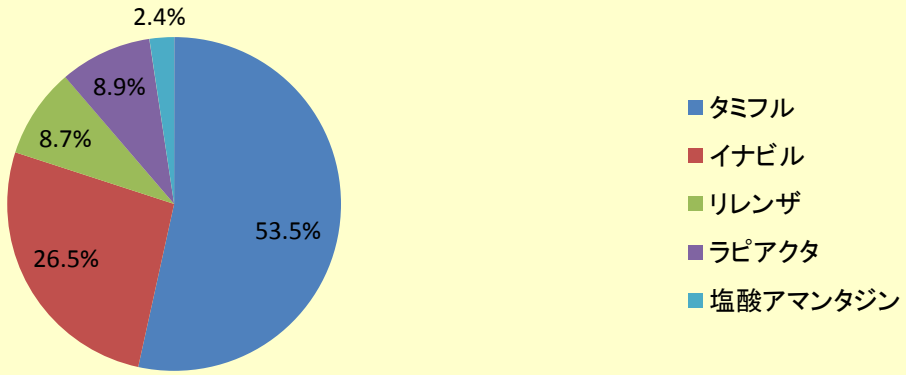
3番目

	n	%
タミフル	89	17.6%
イナビル	110	21.8%
リレンザ	**215**	**42.6%**
ラピアクタ	65	12.9%
塩酸アマンタジン	26	5.1%
総計	505	100.0%

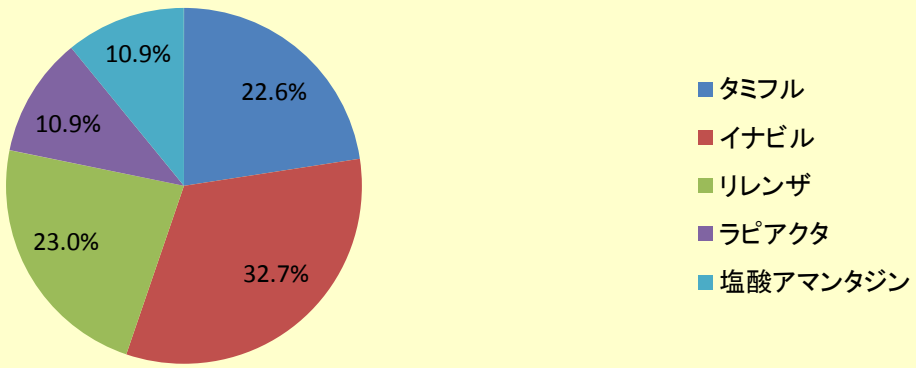
Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

7. 次の選択肢のうち、最も「患者さんが服用しやすい剤形」と考えられている抗インフルエンザウイルス剤を選んでください。また、2番目、3番目にあてはまるものを選んでください。（詳細続き）

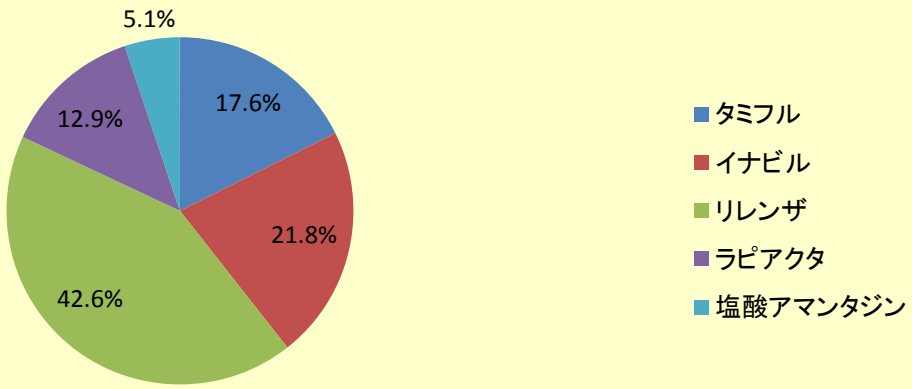
最も服用しやすい剤形の抗インフルエンザウイルス剤



2番目に服用しやすい剤形の抗インフルエンザウイルス剤



3番目に服用しやすい剤形の抗インフルエンザウイルス剤

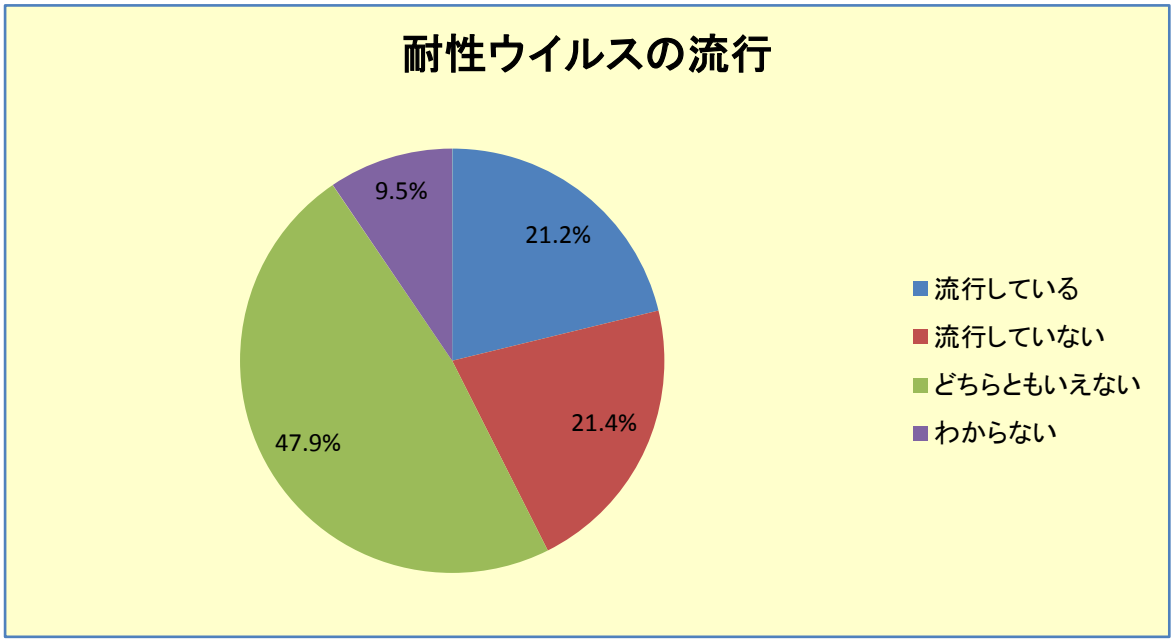


Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

8. 抗インフルエンザウイルス剤に対する耐性ウイルスは市中で広く流行しているとお考えですか。最もあてはまるものを一つ選んでください。

「どちらともいえない」と「わからない」と合わせると過半数であることに加え、「流行している」「流行していない」がほぼ同数であることから、さまざまな情報が錯綜していて、混乱もある状況と考えられる。

	n	%
流行している	107	21.2%
流行していない	108	21.4%
どちらともいえない	242	47.9%
わからない	48	9.5%
総計	505	100.0%

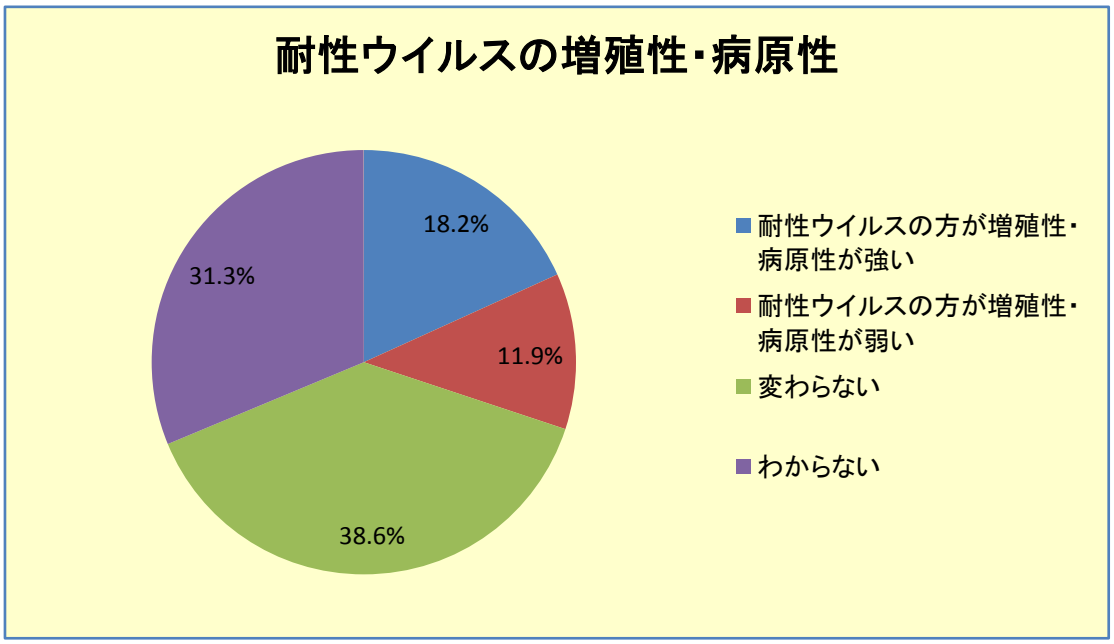


Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

9. 抗インフルエンザウイルス剤に対する耐性ウイルスについて、その増殖性・病原性は通常のウイルスに比べどのように思われますか。最もあてはまるものを一つ選んでください。

耐性ウイルスの増殖性・病原性についても、流行に関する設問8と同様に「強い」と「弱い」の回答医師数が拮抗しており、さらに「変わらない」「わからない」との回答医師が約7割を占めるなど、こちらも情報が錯綜している様子がうかがえる結果となった。

	n	%
耐性ウイルスの方が増殖性・病原性が強い	92	18.2%
耐性ウイルスの方が増殖性・病原性が弱い	60	11.9%
変わらない	195	38.6%
わからない	158	31.3%
総計	505	100.0%



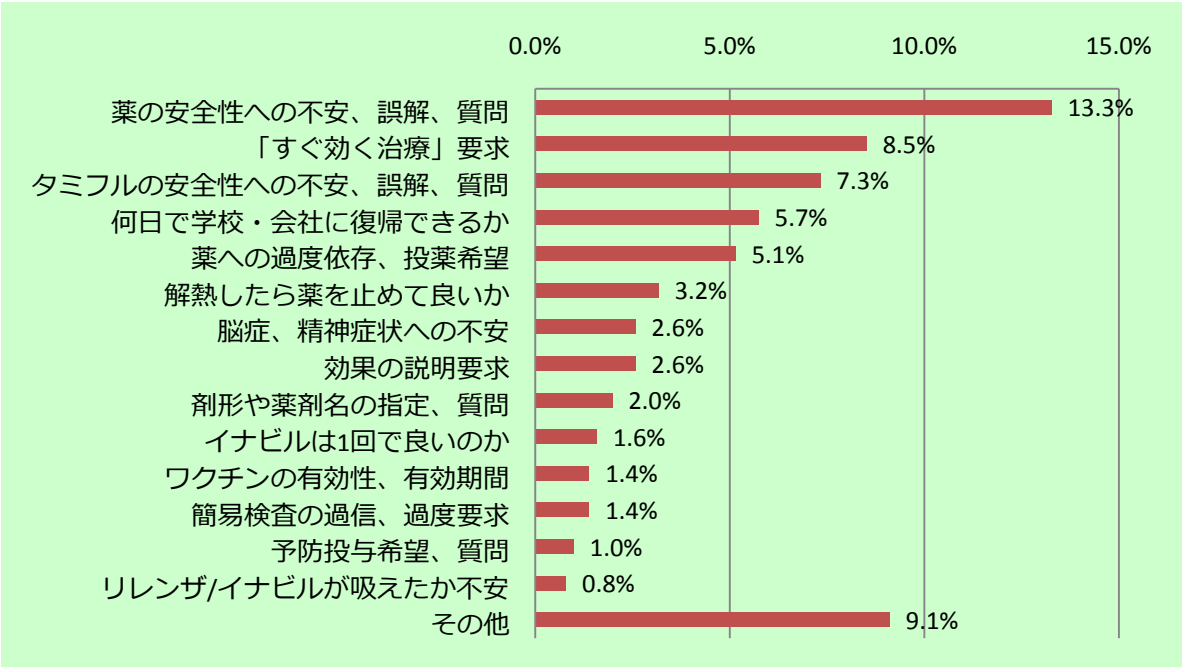
Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

10. 患者からよく受ける、ないし印象に残る、インフルエンザの治療薬や治療方法に関する問い合わせや、要望を教えてください。

患者から受ける質問で多かったものは、「薬の安全性への誤解、不安、質問」「タミフルの安全性への誤解、不安、質問」「脳症・精神症状への誤解、不安、質問」の3点であわせて23%となった。特に「異常行動」「脳症」というワードが含まれる記述文が多く、少なくとも昨シーズンまでは薬剤との関連性について不安を持っていた患者が多いことがわかった。

注：以下の表・グラフは、自由記述回答された内容を簡易的に読み取り集計したもの

	n	%
薬の安全性への不安、誤解、質問	67	13.3%
「すぐ効く治療」要求	43	8.5%
タミフルの安全性への不安、誤解、質問	37	7.3%
何日で学校・会社に復帰できるか	29	5.7%
薬への過度依存、投薬希望	26	5.1%
解熱したら薬を止めて良いか	16	3.2%
脳症、精神症状への不安	13	2.6%
効果の説明要求	13	2.6%
剤形や薬剤名の指定、質問	10	2.0%
イナビルは1回で良いのか	8	1.6%
ワクチンの有効性、有効期間	7	1.4%
簡易検査の過信、過度要求	7	1.4%
予防投与希望、質問	5	1.0%
リレンザ/イナビルが吸えたか不安	4	0.8%
その他	46	9.1%
合計	331	65.5%



Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

10. 患者からよく受ける、ないし印象に残る、インフルエンザの治療薬や治療方法に関する問いや、要望を教えてください。（詳細続き）

以下にコメント例を挙げる。

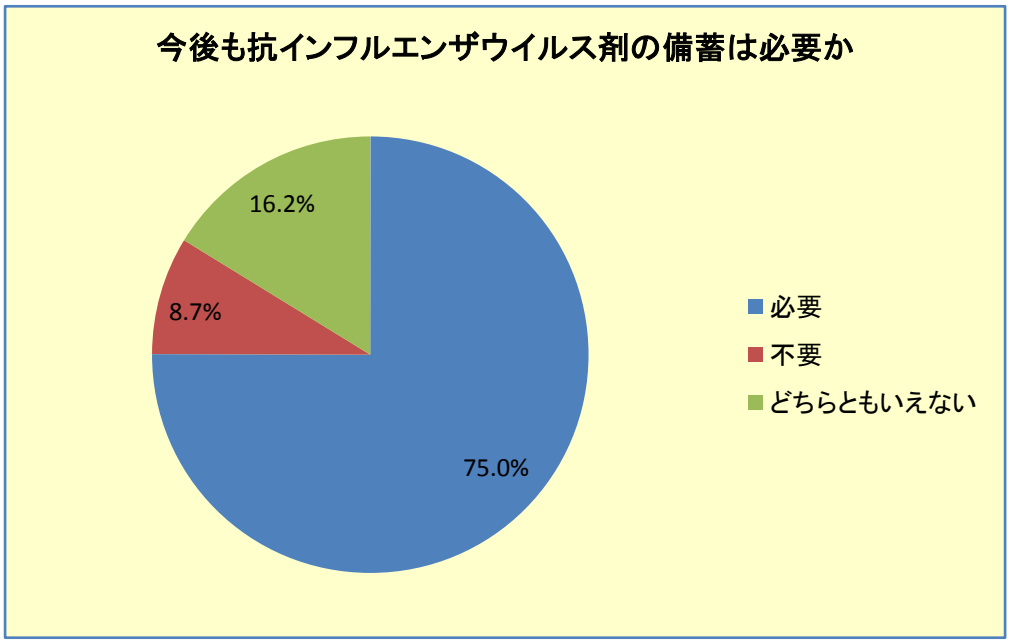
治療薬でいつ症状がよくなり、登校・登園が出来るようになるのか、よく質問を受ける。	内科
多くの患者が熱が下がれば治癒したと勘違いされる。	内科
なにがなんでも抗ウイルス薬でなければならないという考え方はいただけないと思う。	内科
インフルエンザキットによる診断に非常にこだわる印象がある。	内科
治療薬の使用日数について　決められた日数きっちり服用（吸入）しなければならないか	内科
簡易検査の有用性と限界について知らない人が多く、検査結果に関する質問が多い。	内科
色々な報道があっても、インフルエンザの診断がつくと抗インフルエンザ薬をほぼ全員が希望されるので、製薬会社には安全性についてさらに追及していって欲しいです	内科
必要がないと思われる場合でも処方を強く希望することが多い	内科
最近は異常行動との因果関係について患者からの質問が少なくなった。	内科
熱に対して、恐怖感を抱いている人が多すぎると感じる。薬は完全に良いもので、全く悪影響が無いことが当然と思っている人も多い。その上で、副作用の報道がなされると、混乱。	内科
ワクチンをいつ注射したらよいのか？　熱があったり、妊娠中でもワクチン接種は大丈夫か？など	内科
母親からいろいろ副作用について質問をうけることが多い。	小児科
家族内で誰かが発症している場合に症状がなくても投薬を希望される。	感染症科

Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

11. 新型インフルエンザの発生に備え、今後も抗インフルエンザウイルス剤の備蓄は必要とお考えですか。

４人に3人の医師がウイルス剤の備蓄は必要と考えている。

	n	%
必要	379	75.0%
不要	44	8.7%
どちらともいえない	82	16.2%
総計	505	100.0%



Copyright © QLife, Inc. All Rights Reserved.

本調査に関するお問い合わせ先:

株式会社QLife 広報担当　田中
TEL：03-5433-3161 ／ E-mail : info@qlife.co.jp

＜株式会社QLifeの会社概要＞
会社名 :株式会社QLife（キューライフ）
所在地 :〒154-0004　東京都世田谷区太子堂2-16-5　さいとうビル4F
代表者 :代表取締役 山内善行
設立日 :2006年（平成18年）11月17日
事業内容:健康・医療分野の広告メディア事業ならびにマーケティング事業
企業理念:生活者と医療機関の距離を縮める
サイト理念:感動をシェアしよう！
URL：http://www.qlife.co.jp/

Copyright © QLife, Inc.　All Rights Reserved.